

人間の使命

日ごとに風の暖かさが増し、空の色にも、電車の中の風景にも、季節が確かに進んでいることが感じられます。令和3年度が終わろうとしています。東京でオリンピック・パラリンピックがあったこと。そこで見事銀メダルを獲得された私たちの先輩、大矢勇気選手にこの体育館に来ていただいたこと。香風祭。研修旅行。みな、ついこの間のことのようにも、ずっと前のことのようにも感じます。季節の変わり目や何かの節目の時には、いつもこうして一年の早さと長さを同時に感じます。とても不思議な気持ちです。

そのような中で、私はことある度に「日常の大切さ」「暮らしを守ることの大切さ」を話してきました。コロナ禍が続くこの時代に高校生活を送るみなさんにとって、不安なとき、何かに迷ったときの道しるべのひとつになれば、という思いからです。みなさんは日々の暮らしを大切にできていますか？

今また、世界は大きな不安に包まれています。21世紀のこの世界でまさか起きるはずはないと思っていた争いが、連日私たちの目や耳に飛び込んできます。まるで時間が何十年も遡ってしまったようで、でもそれは間違いなく今現実起こっていることで、押し寄せる情報の前で何もできず、ただ立ちすくんでしまうだけの自分がいます。

突然ですが、私の大好きな漫画に「MASTER キートン」という作品があります。元イギリス陸軍の特殊空挺部隊という経歴を持つ主人公キートン太一が、大学講師や保険調査員という仕事の中で様々な事件に関わり、それらを解決していくというお話です。アクションでもあり、人間ドラマでもあります。多くがヨーロッパを舞台とするストーリーで、その中に世界の歴史や社会、政治の問題が織り交ぜられ、大変読み応えのある作品です。私は最近ニュースを見ながら、そんな「MASTER キートン」のある一場面をいつも思い出します。

それは「屋根の下の巴里」というエピソードの中で、主人公のキートンが彼の恩師ユーリ・スコット先生を思い出す場面です。第二次世界大戦中、イギリスのロンドンがドイツの激しい空襲を受けました。そのとき、スコット先生の大学も大きな被害を受けました。空襲の後、スコット先生は瓦礫の中から教科書を拾い上げ、真っ黒に汚れたスーツ姿で集まった人達にこう言います。

「さあ、諸君、授業を始めよう。あと15分はある。敵の狙いは、この攻撃で英国国民の向上心をくじくことだ。ここで私達が勉強を放棄したら、それこそヒトラーの思うつぼだ。今こそ学び、新たな文明を築くべきです」

物語を通して、人は大変なときでも、むしろ大変なときだからこそ、学びを止めてはいけない。日常を、暮らしを止めてはいけない、というメッセージがしっかりと伝わってきます。作品の中ではそれを「人間の使命」という強い言葉で表現していました。

世界には喜びもあれば悲しみもあります。晴れの日もあれば雨の日もあります。風や、霧の日だってあります。それでも日々は続いていくのです。自分の行く先がわからなくなったとき、不安になったときには、いつもしていることを大切にしてください。まずは何かを食べてください。ゆっくり眠ってください。目が覚めたら、働く。勉強する。日々の「暮らし」を続けていく中で見えてくるものが必ずあるはずですよ。これからも誠実に、自分のできることを続けていきましょう。

令和4年3月23日

兵庫県立西宮香風高等学校
校長 谷口 暢謙